豊かなコミュニケーションを育てていこうとした実践

身近な人とかかわりながら見通しをもって、いきいきと生活する子をめざして

小　坂　祥　子

はじめに

本児は本校小学部に入学し、現在４年生である。好奇心旺盛で、世話好き、いたずら好きな本児は次は何をしようかといつも目を輝かせている。その好奇心や探求心、いたずらに没頭する集中力が、これまでの本児の成長の源であったように思う。今まで、まさに自我のままに行動し、それを十分に充実させてきた本児であるが、高学年を目の前にしてそろそろ気持ちのコントロールや見通しを持った行動ができることもねらっていきたいと考えた。

本児のもっている好奇心や探求心、人と関わりたいという気持ちを大切にし、それを十分満足させていきながら、少しでも先の見通しをもって行動したり、言葉で気持ちがコントロールできるような自制心への芽生えの段階に移行させていきたいと考える。

１．プロフィール

(1) 生　育　歴

・昭和58年10月19日生　10歳２か月　小学４年　　男子　ダウン症

・未熟児（34週）体重2,300ｇ　首のすわり９か月　歩行26か月　眼球振盪あり

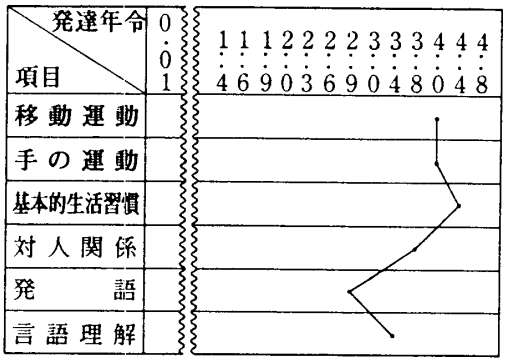
・Ｔ療育園通園６か月～２歳過ぎ　Ｍ保育所入所３歳頃　本校入学６歳５か月

・家族は両親と兄（高校２年生）と妹（保育園年中組）の５人家族。自営業のため昼の時間が比較的自由になり、両親は本児との関わりをたくさん持つよう努力している。両親とも本児の教育について非常に熱心であり、担任と連携をとった指導を望み、積極的に取り組んでいる。

(2) 諸検査による実態

・左図のように遠城寺式乳幼児発達検査（Ｈ．５．６実施）では、２歳半から４歳の発達を示し、手の運動・基本的生活習慣については数値が高いが、言語面での落ち込みが著しい。

・新版Ｋ式発達検査（Ｈ５．６実施）では３歳前半の課題を通過中であり、まだ自制心の芽生えの時期には達していない。



遠城寺式乳幼児発達検査

(3) コミュニケーションに関する実態

・伝達の機能としては、相互関係、個人、道具、規制、想像、探求、情緒的などの機能すべてをもつ。

・言語形態は全て音声言語によるが、何らかの動作、身振りを伴っていることが多い。

・一語文や二語文の未熟な言い方ではあるが感情が伴い、何となく相手に伝わる。

・自分の思いが伝わることの喜びを知っており、嬉々として話す。自己中心的な言葉が多い。

・使える語彙は徐々に増えているが、そう多くない。パターン化した言葉の使い方も多い。

(4) 行動特性

・自分の思いがあり、頑固にそれを通そうとする。

・周りの人に進んであいさつしたり人の世話をしたりし、人との関わりを持とうとする。

・いたずら好きで、時々いたずらをしたり、人をからかったりする。

・好きな遊びには集中し、工夫しながら遊ぶ。

2．取り組みの構想

個人目標　身近な人とかかわりながら、見通しをもっていきいきと生活する子

↓

つけたい力　・基本的生活習慣の確立　・先の楽しみをもち、見通しをもって行動する力
・指示を聞いて行動する力　・言語理解力と認知力

↓

コミュニケーションに視点をあてた取り組み

仮説　本児は伝達の意図や意欲を十分に備えているが、使える語彙数は限られ、その方法は未熟な一語文や二語文であって、音声も不明瞭である。そこで、相手をする身近な大人が、本児の意図を読み取り、伝達への自身や喜びを持たせながらコミュニケーションの意欲をさらに高めていく必要がある。①本児がもっている、人と関わりわりたい要求や興味を活用しながら、たくさんのコニュニケーション場面をつくっていく。また、②生活経験を豊かにし本児なりの表現を大切にしながらも、リフレクティング※し、正しい言い方や発声に近づけていく。さらに、③最近興味をもって取り組みだした本読みや日記の指導を通して、構文の形やよい表現方法を知らせたり、積極的に模倣パターン化した言い方を取り入れたりして、本児の体の中にしみこませていく。以上のような取り組みを続けていくことで、少しでも相手にわかりやすい、豊かな表現に近づいていくことができると考える。また、そのようなコミュニケーションの力を身につけることによって自分を見つめ、少しは指示を受け入れながら見通しをもった生活ができる子に近づいていけるものと考える。

↓

めざすコミュニケーション像　自分の思いをより豊かに表現する子

↓

つけたい力　・人の話がわかる言語理解力　・わかりやすい発声と発語の力
・使える言葉の拡大　・自分の思いを伝える言葉や文の表現力

指導方針　①教師が真心をこめた「よい聞き手」「よい話し手」になるよう努め、話しやすい教室の雰囲気づくりや学級経営に努める。

②生活経験を豊かにし、その中で生ずる本児なりの表現を大切にしながらリフレクティング※し、正しい発声や表現に近づけていく。

③指導の方針をはっきり家庭に知らせ、連携をとりながら指導に当たる。

④本児の興味、能力を利用した指導を進め、集団指導と個人指導を弾力的に行っていく。

⑤日記や本読みを日課とし、それを通して少しでも構文の形での表現方法に近づける。

（実践）

生活単元学習	日常生活	遊びの時間
・生活経験の広がりや深まりをねらう。 （クラス） 友だちと関わりながらいきいきと活動し、自分の思いや自分なりの表現が認められる場とする （合同） 本児の力を大きな集団で発揮し応用し、評価する場とする。みんなに合わせて行動し、自己コントロールをする場とする。	・担任や学級の友だちと個別に関わり、心の通う場とする。 あいさつや自然発生的な状況の言葉を大切にし、意図してその場に応じた言葉づかいや表現方法について指導する。 （自由遊び） 先生と遊びを通して関わったりクラスの友だちと心を通わせてコミューケーションする喜びを体験する場とする。	・遊びそのものを思い切り楽しませる。 自発語や自然な感情の表現を大切にし、受け入れる。遊びを活動の源にしながら先生や友だちと何らかのコミュニケーションをかわしながらいきいきと遊ばせる。

↑

家庭との連携

3．指導の実際

学級でのかかわりの中で育っていった実践

学校生活の中でほとんどの生活基盤をなす学級は、子どもたちのコミュニケーションの意欲をかきたて、子どもたちの出す発信をやさしく受け止める、まさにコミュニケーションを育てる温床でなくてはならないと考える。そのような考えから、学級づくりを通して学級のメンバーや担任との関わりの中でいきいきと生活し、コミュニケーションの力を伸ばしていった実践について述べてみたい。

①朝の会の場面で（本児の司会風景）

本　　児	友だちや先生
これで、	→ S男：これからだよ
あっ、あ、これから朝の会を始めます。えい。	→ O男：えいじゃない、れい。
きのうのこと きのうはお父さんと、お母さんと、……	→ O男：りさちゃんは

②登校時の場面で

本　　児	友だちや先生
べちゃべちゃぴちゃぴちゃ	→ 先生：今日は雨になっちゃったね。
あ〜あ（カッパを脱いで）	
べとべともうー	→ 先生：ああ本当、ぬれたね。
おはようございます。	→ 先生：おはようございます。
Wちゃん、おはよう	→ W男：おはよう
S君おはよう	→ S男：おはようNちゃん。

りさちゃんと（食べるふり）食べました。 →	O男：何を
ごはんを食べました。 →	O男：ごはんだけ肉は
（動作つきで）	
肉、食べた。 →	S男：肉を食べましたでしょ
肉を食べました。 →	O男：おいしかった
おいしい	先生：じゃあ、ていねいに言おうか。おいし…
おいしかったです。 →	O男：ぼくのうちはカレーだった
これでおわります。れい	（拍手をする）
先生のおはなし →	S男：おはなしでしょ
田中先生おねがい（先生の手を引きに行く） →	先生：はいはいわかりました

こらー、だめよ。（M男が裸でいるのを指さして） →	先生：M君、服を着てください。
何してんの？ →	先生：プリント折ってるよ。
ぼくもする。 →	先生：ありがとう
いっしょ！（鞄から人参を出して） →	先生：あっ、そうだね。一緒だね。（プリントに人参の絵がついていた）
作る。 ←	先生：今日カレー作ろうか。

友だちや先生と楽しいおしゃべり

家庭との連携を通じて育っていった実践

① 日記と本読み

日記を書くことと本読みを毎日の日課とし、家庭と学校がいっしょになって、少しでも構文の形での表現方法に近づけたり、大きな声で明瞭な発音で文が読めたりできるよう指導していった。

●日記と作文指導について

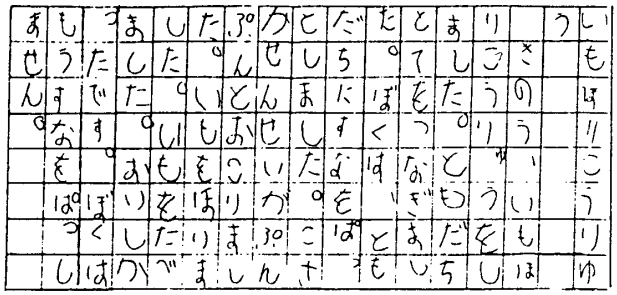
（学校）生活ノートや学級だより等であったできごとを家庭に知らせる。 ↘

（家庭）家庭や学校であったことをもとに、本児が言った言葉をふくらませ、いっしょに文にしていく。本児の言葉をエキスパンション※したりパラレルトーク※したりしながら文の形にし、本児が日記帳に書いていく。母親はイメージがわくようにジェスチャーを取り入れたり、その時の様子を絵に描いたりして援助した。

↙ （学校）書いてきた日記を朝の会で発表したり、先生とその話題をもとに話をしたりする。

＊学校でも作文指導の時には家庭と同じ方法で行った。下はその様子である。

教　師	本　児
きのう交流をしたね。 →	こうりゅう
何をしたっけ？ →	いも（掘る動作をする）
いもをほりました。	
誰と？ →	わかんない。
友だちとだね。 →	いっしょ（手をつなぐふり）
そうそう手をつないで	
どこにいった？ →	？？？
うさぎごやに →	行きました　マル



本児の作文

そうだNちゃん砂を投げたね。	パッとした。（投げるふり）
	プンプンした。（頬をふくらませて）
誰？	小坂先生
小坂先生がプンプンとおこりました。	（以下略）

ジェスチャーをとり入れた作文指導

●本読みについて

本児の能力にふさわしいと思われる国語の本を与え、毎日読むようにさせた。「本読みカード」をつくり、家庭で読めたらシールを貼って励ました。また、学校でも朝登校して着替えがすんだら本読みをする時間として位置づけた。時々「本読み大会」を設定し、本読みの練習の成果を発表し合った。本児ははりきって大きな声を出して読み、シールを貼ってもらうことを喜んだ。本読みの継続の中で、拗音や促音の読み方がしだいに正確になっていった。

② 劇づくりを通して

劇あそびの好きな本児は、劇練習用テープ（指導者たちが劇の流れにそって台詞や音楽を吹き込んだもの）を家庭で毎日１～２時間聞き、一緒に台詞を言ったり体を動かしたりした。劇の発表の場である「たなばた発表会」では長い台詞も覚え、自信をもって王様の役を演じた。

王様の役を演じるN男

日常生活の中で育っていった実践

本児の世話好きな性格や興味・関心を利用して次のような係の仕事を与え、継続して行うことでコミュニケーションの高まりをねらった。

健康観察の係	お茶をもらいにいく係	コピー・印刷を手伝う係
朝の会の健康観察の時に「○○さん元気ですか」と言って、返事をもらう。本児は大きな声で友だちにわかるよう言えるようになった。司会の流れを紙に書き、パターン化させることで自信をもって司会ができた。	おやつの時間に教官室に行ってお茶をもらう。入室の時に「しつれいします。」退室の時に「しつれいしました。」を習慣づけた。他学部の先生方に突然に話しかけられることがあり、よいコミュニケーションの機会が得られた。	事務室でのあいさつや、枚数を数えること、お礼、お願いなど日常的な会話の機会が得られた。学校内外のいろいろな人に接し、正しい言葉の使い方やマナーも要求された。

４．考察と今後の課題

伝えたいという意欲に富み、未熟ながら表情豊かに訴えかける本児の姿は、小学部の目指すコミュニケーション像に、少しずつ近づいていることを感じる。生活の中で、あれっと思える表現をしたり、先生や友だちとスムーズな受け答えをしたりする場面が増えたこと、あるいは先生の仲立ちなしでも友だち同士で遊べだしたこと、大きな声で正しく本読みができだしたこと、少しのヒントで構文の形の表現に言い直すことができだしたこと等は豊かなコミュニケーションの力の芽生えとして評価したい。かつては自我むきだしであった本児も、今では少しずつ言葉かけで行動が自制でき始めている。

今後も周りの大人が本児のコミュニケーションの意欲を大切にしながら、気持ちを言語化したり、内面的な言葉かけをしたりしながら、近づいてくる高学年としての自覚をつけさせていく中で自制心の芽生えをねらっていきたい。